

# さいたま市ゆかりの文学者と描かれたさいたま(近現代編)



## 大宮公園と文人たち

**■正岡子規 (1867-1902)**  
昭和24年秋に大宮公園を訪れ、公園内の旅館萬松楼に滞在した。この時は夏目漱石が松山から呼ばれて滞在中。「寒山落木」(明治31)は子規が大宮公園を訪れた時の俳句を収める。

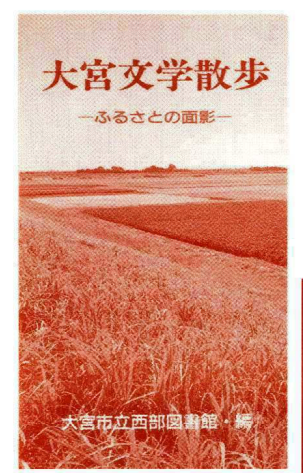
**■森 鷗外 (1862-1922)**  
島根県生まれ。「青年」(大正2)には主人公と親友の二人が大宮公園で人生論などを語り合う場面や、公園内の料理茶屋なども描かれている。

他にも、明治期には樋口一葉「創作断片」、正岡子規「墨汁一滴」「病床六尺」、永井荷風「野心」「歡樂」、国木田独步「第三者」、正宗白鳥「微光」が大宮公園を作品の中で表現している。また、大正時代には寺田寅彦「写生紀行」、田山花袋が随筆「東京の近郊 一日二日の旅」「東京近郊一日の行楽」などで称讃している。武蔵野の面影を求めて多くの文人たちが訪れた。



**■大西民子 (1924-1994)**  
岩手県生まれ。昭和24年から40余年大宮に住む。岩槻にも数年住んだ。県立図書館に勤務しながら木俣修に師事して作歌を行う。「まぼろしの椅子」(昭和31)、「風水」(昭和57)などを出版。岩槻浄国寺境内に歌碑がある。

**■森田公司 (1926-)**  
南中野生まれ。大正中・大宮北中・東中などに勤務しながら句作し、大宮北高時代に第一句集「寒雷」を出版。



**描かれた岩槻**

**■円地文子 (1905-1986)**  
「人形姉妹」(昭和46)に岩槻が描かれている。

**■中町 信 (1935-)**  
岩槻市在住。「自動車教習所殺人事件」に岩槻公園付近が描かれている。

**岩槻城址公園**

**■榎 皓志 (1924-)**  
中勤助の唯一の弟子。住まいは浦和。城址に岩槻人形を歌った詩碑がある。

**浦和と児童文学**

**■石井桃子 (1907-)**  
常盤町に生まれた。浦和高等女学校(現・浦和第一女子高校)を卒業。ミルンの「くまのプーさん」、ポターの「ピーターラビットの絵本」シリーズなどの翻訳や、創作には「ノンちゃん雲に乗る」(昭和22)など。自伝的作品「幼ものがたり」(昭和56)では当時の生活を細やかに描いている。「岩波少年文庫」の編集や「東京子ども図書館」の創設などにも携わり、家庭文庫の活動家としても有名。

**■瀬田貞二 (1916-1979)**  
トールキン著「指輪物語」の翻訳など、児童文学の翻訳・評論・創作で大きな業績を残した。日本の民話「かさじぞう」「ふるやのもり」も長く読みつがれ愛されている。浦和の自宅に「瀬田文庫」を開く。

**■早船ちよ (1914-2005)**  
昭和19年に現在の川口市に疎開後、瀬ヶ崎に住んだ。映画化もされた「キューポラのある街」(昭和36)は有名。岩槻城跡に詩碑がある。

**■佐藤紅緑 (1874-1949)**  
青春小説「あゝ玉杯に花うけて」(昭和3年)の中には師範学校(現・埼玉大学教育学部)の学生や、調神社、裏門通りなどが描かれている。

**大宮と詩人**

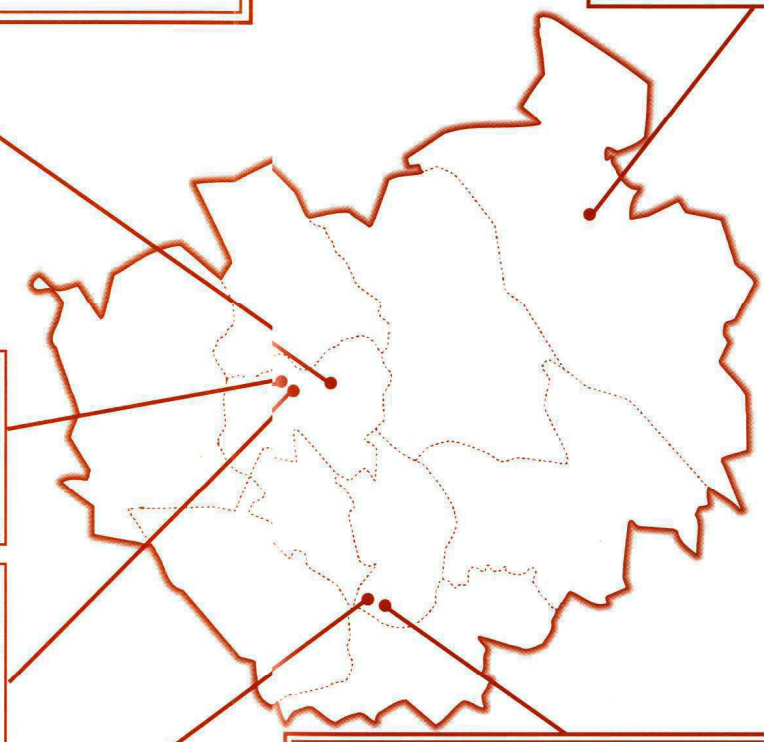
**■宮澤章二 (1919-2005)**  
羽生に生まれ、昭和23年大宮に移住した。大宮市教育委員を2期8年務め、現代詩や童謡、合唱曲に力を注いだ。小学校の教科書に使用されたクリスマス・ソング「ジングル・ベル」は彼の歌詞に統一された。浦和駅西口に詩碑がある。

**■大木 稔 (1913-1996)**  
戦後、大宮に転居し以後大宮市役所職員として退職まで勤務。大栄橋を素材にした「陸橋」など、大宮を詠んだ詩も多い。

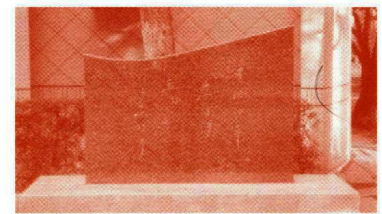
**■中村 稔 (1927-)**  
大宮に生まれ大宮北小学校に通った。作品に県内各地を描いた「故園逍遙」などがある。宮沢賢治の研究者としても有名。

**■井伏鱒二 (1898-1993)**  
大成町の普門院の住職阿部道山和尚をモデルにした小説「普門院さん」(昭和22)がある。

**■太宰 治 (1909-1948)**  
昭和23年5月に2週間ほど大門町に滞在し、時には氷川神社の参道を散歩しつつ「人間失格」を完成した。自殺前夜も大宮の地を訪れている。



**■長谷川かな女 (1887-1969)**  
昭和3年以来浦和に居住し、昭和5年からは俳誌「水明」を創刊・主宰した。岸町などに住んだ。調神社と別所沼公園に句碑がある。現在、女性による俳句活動が盛んであるのは、かな女の功績によるところが大きい。



**浦和を描いた作家たち**

**■水上 勉 (1919-2004)**  
戦後の一時期、白幡の土蔵に仮住まいし、処女作「フライパンの歌」を出版した。短編推理小説「崖」は岸町・白幡町が作品の舞台となっている。

**■土岐雄三 (1907-1989)**  
昭和9年から浦和に住む。作品に浦和が出てくることが多く、ベストセラー小説「カミさんと私」(昭和33)をはじめ、「花嫁の父」(昭和41)や、「大きなお世話だ！」(昭和61)、自伝的な小説「カミさんと私」の物語(昭和61)などに浦和が登場する。

**■澁澤龍彦 (1928-1987)**  
幼年期に川越市に住み、その後北浦和に下宿して旧制浦和高校を卒業。当時の思い出を「玩具物語」(昭和54)や「狐のだんぶくろ」(昭和58)に書いている。

**与 野**

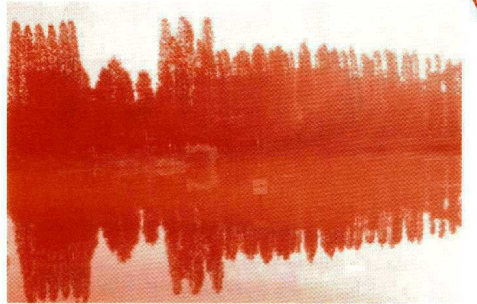
**■加藤克巳 (1915-)**  
歌人。昭和4年浦和中学校に転入学。その年から与野に住む。第一歌集「螺旋階段」。鈴谷東公園、普門院に歌碑がある。

**■大西巨人 (1919-)**  
昭和31年より大宮・北浦和・上木崎・与野本町・円阿弥と転居し埼玉在住が長い。与野を描いた作品に「運命の賭け」の中のルポ「埼玉県与野」、「巨人雑筆」の中の「遼東の家」「本町通り」などがある。「深淵」(平成16)では主人公が与野市から失踪する。

**別所沼公園**

**■神保光太郎 (1905-1990)**  
昭和9年に別所沼近くに移り住み、以後没するまで50年余りをこの地で過ごした。沼畔に別所沼が題材となっている「冬日断抄」の詩碑がある。他にも野田の鷺山を素材とした「鷺」など、郷土を表現した詩を多く残した。学校の校歌の作詞も多い。

**■立原道造 (1914-1939)**  
神保の友人で詩人。湖畔に住みたいと、ヒアシンスハウスと名付けたコテージを設計したが、わずか24歳で夭折。ヒアシンスハウスは、平成16年に市民などにより建設された。



さいたま市にゆかりのある文学者はまだまだ大勢います。今回は近現代を中心に紹介しました。市内のあちこちに句碑や歌碑なども残されています。ゆかりの地を訪ねる文学散歩など楽しんでみてはいかがでしょうか。

**<主な参考文献>**

「大宮文学散歩」……………大宮市立西部図書館編 大宮市教育委員会 1991  
 「埼玉の文学」……………さいたま文学館 1997  
 「企画展大宮公園と文学者たち」……………さいたま文学館 1999  
 「企画展近代埼玉の女性文学」……………さいたま文学館 1999  
 「企画展ヒアシンスハウスに夢を託して」……………さいたま文学館 2005  
 「さきたまの文人たち」……………松本鶴雄著 さきたま出版会 1997  
 「埼玉の文学めぐり」……………関田史郎著 富士出版 1972  
 「埼玉の文学—その作品と風土」……………秋谷豊編 さきたま出版会 1979  
 「新埼玉文学散歩 下」……………榎本了著 まつやま書房 1991  
 「埼玉現代文学事典 増補改訂版」埼玉高等学校国語科教育研究会 1999